シンポジウム「斎宮跡と久留倍官衙遺跡」《壬申の乱と斎宮》

初期斎宮の解明

斎宮歴史博物館
大川勝宏

1. 壬申の乱と斎宮

天武元(672)年　壬申の乱の勃発

6月24日	大海人(おおあま)皇子が吉野から皇后・草壁皇子らを伴い脱出。 隠(なばり)の駅家（うまや）を焼く。 大海人皇子の笠竹(ぜいちく)の占い。 伊賀の駅家を焼く。
6月25日	積殖(つむえ：柘植の付近)の山口で高市(たけち)皇子と合流。 伊勢国司らが大海人軍を迎える。 三重郡家に到着。
6月26日	朝、**朝明郡の迹太川(とほがわ)のほとりで天照大神を遥拝。** 大津皇子と合流。朝明郡家（ぐうけ）を経て桑名郡家に泊。
6月27日	大海人が不破の郡家に入る。野上に行宮(あんぐう)を設ける。
6月29日	大海人は和暫(わぎみ:関ヶ原付近)で高市皇子に全軍の指揮を任せる。
7月　2日	大海人軍を大和と近江の二方面に分けて進軍させる。 犬上川の戦い。
7月　3日	大伴吹負(ふけい)を奈良山に駐屯させる。
7月　4日	奈良山の戦い。
7月　7日	莉萩野(たらの:伊賀市域か)の戦い。
7月13日	息長(おきなが)の横河(米原付近か)の戦い。
7月22日	瀬田橋の戦いで近江朝廷軍が大敗。
7月23日	近江朝廷側の大友皇子(弘文天皇)が自決。
2月27日	**飛鳥浄御原宮(きよみはらぐう)で天武天皇即位。**

大来（おおく）皇女の伊勢派遣

天武天皇二(673)年　4月14日	大来皇女が泊瀬斎宮に入る
天武天皇三(674)年10月　9日	**大来皇女が伊勢に向う**

2. 斎宮を貫く古代「伊勢道」

- 史跡を西北西～東南東に貫通する古代の官道が史跡内各所で見つかっている。
- 遺構は道路側溝のみ。部分的に深く掘ってあり、雨水を浸透させようという工夫がみられる。
- 側溝の心々で幅約8.9mある。奈良時代初めの基準尺で25大尺（1大尺

≒35,6㎝）になる。

・史跡斎宮跡の東約１km の丁長（ちょなが）遺跡でも道路の延長が確認され、延長約２．５km の長さにわたってほぼ直線の道路が確認されている。

・奈良時代中ごろ（８世紀中頃）には側溝の埋没がみられる。いつ（７世紀の終りから８世紀の初め頃に造営されたか？）、何を契機に直線道路が整備されたのか？

⇒「壬申の乱」の頃には直線道路は無かったと考えられる。

「伊勢道」の整備は斎宮の整備と連動するのか？律令国家建設に伴う地方制度の整備と連動するのか？王権と伊勢神宮の結びつきの強化に関係するのか？

3. 解明進む飛鳥～奈良時代（7世紀末～8世紀）の斎宮

・史跡南西部の斎宮の台地の最も標高な高い地点（13～14.5m）付近は、かねてから飛鳥～奈良時代の遺構が多く、この時代の重要な部分を囲んだとみられる掘立柱（ほったてばしら）の塀が複数ケ所みつかっている。塀は、柱の間隔が８尺（約 2.4m）程度のものが多い。

・掘立柱の塀は四角い囲みを作り、縦（南北）56m、横（東西）48m 前後の区画が４～５回建て替えられていた可能性が高まっている。

時代	斎王	天皇	在任期間	群行
飛鳥	大来皇女（おおく）	天武	673 ～ 686	○
	×	持統	―	―
	当耆皇女（たき）	文武	698 ～ 701	○
	泉皇女（いずみ）	文武～元明	701 ～ 706	○
	田形皇女（たかた）		706 ～ ?	○
	多紀皇女（たき）	元明	?	?
	智努皇女（ちぬ）		?	?
奈良	円方女王（まどかた）		?	?
	久勢女王（くぜ）	元正	?	○
	井上内親王（いのうえ）	元正～聖武	721 ～ ?	○
	県女王（あがた）	聖武	? ～ 749	○
	小宅女王（おやけ）	孝謙	749 ～ ?	○
	山於女王（やまお）	淳仁	758 ～ ?	○
	×	称徳	―	―
	酒人内親王（さかひと）	光仁	772 ～ ?	○

《参考》飛鳥～奈良時代の斎王表

・上の斎王表のうち、飛鳥時代の斎王は、多気郡に斎宮を営んだか、まだ不明な点が多く、また大来皇女以外の斎王は在任期間が間断なく続いており、斎宮の大規模な建て替えは困難。
・群行の不明な元明～元正朝の斎王以後には、井上内親王（721年斎王となり、726年頃伊勢へ）の頃に斎宮の様々な制度が整備されていることが史料からわかる。

養老二(718)年	斎宮寮の公文にはじめて印を用いる	『続日本紀』
神亀四(727)年	斎宮寮の官人121人を補任する	『続日本紀』
神亀五(728)年	斎宮寮官人の官位相当の規定が整えられる	『類聚三代格』
天平二(730)年	斎宮の年料を官物から支出することとする	『続日本紀』

・井上内親王以後、3人の斎王ののち、称徳朝には斎王派遣の記録がない。
・以上のことから、今後史跡西部で確認されている掘立柱塀の区画が、それぞれの斎王の斎宮として特定されていく可能性が高い。

⇒『遷宮する斎宮』

4. 平安時代の斎宮～方格地割の解明

《方格地割の成立》

① 奈良時代終りに、光仁天皇が酒人内親王を斎宮に派遣するのに伴い、斎宮の中心が史跡の東部へ移動する。

宝亀二(771)年　気太王（けたおう）を斎宮造営のため派遣する　『続日本紀』

②桓武天皇の朝原内親王派遣のころに、光仁時代の斎宮を中心に拡張するかたちで方格地割が成立。

延暦四(785)年　紀作良（きのつくら）を造斎宮寮長官とする　『続日本紀』

② 9世紀第一四半期のうちには最大で方形区画が、東西7、南北4まで広げられる。

延暦二十二（803）年　史生（ししょう）四員の増員　『日本紀略』
大同三（808）年の　炊部司に主典（さかん）を置く　『日本後記』

《方格地割の設計》

・光仁朝の斎宮中心部(450尺(133.2m)四方の方形区画＝鍛冶山西区画)を中心に、400尺(118.4m)四方の区画をつけ足していく。区画間に計画幅50尺(14.8m)の道路敷地を作り、その中で道路側溝を掘る。側溝の規模により道路の路面幅が変わる。
・方格地割と都城の条坊の設計と比較すると、大部分は長岡京～平安京の設計に類似。
・柳原区画での計測では、方格地割は南北方向で約4°20′西に振ったラインを基準としており、設計・施工とも高い精度がうかがわれる。
・方格地割の中央部の「鍛冶山（かじやま）西区画」と「牛葉（うしば）東

区画」は、内側を柱の間隔 10 尺（約 3m）の大型の塀で囲まれ、饗応・祭祀に使われた土器が大量に出土することなどから、斎王の御所「内院」とみられている。「内院」は、方格地割の中で固定され動かなくなる。

⇒『固定された斎宮』

5．久留倍官衙遺跡とその評価を巡って

《久留倍遺跡の古代の各期の遺構について》

《Ⅰ期　７世紀末～８世紀前半（ＨＰでは７世紀第三四半期～８世紀前半）》

・現在、「朝明郡衙（ぐんが）」説と「朝明駅家（うまや）」説がある。ただし、いずれも「政庁」が東面する点や、推定東海道との位置関係で問題がある。また、Ⅱ期の大型建物（聖武天皇東国行幸の頓宮（とんぐう）？）により、地域の行政の拠点である郡衙等が容易に移転させられたのかという疑問もある。

・「政庁」が東面する理由を考えるうえで、大宝二(702)年の持統上皇の三河行幸の際の行宮（あんぐう）なども考えられないか？　その場合、朝明郡の中心は、現時点では四日市市伊坂町の西ケ広遺跡付近に想定したい。

《Ⅱ期　８世紀前半～後半（ＨＰでは８世紀中頃から後半）》

・聖武天皇東国行幸の際の頓宮（朝明頓宮あるいは狭残（さざら）行宮）か、大型の倉庫群と考えられている。

・見つかっている大型建物（ＳＢ４３７・ＳＢ４３９）は桁行（けたゆき）が偶数間（14 間）であり、天皇が座す正殿にはあたらない。よほど丘陵上で地形が変えられ、大型建物の柱がすべて削り取られたとみないと、正殿がない理由が説明できない。

・一方で、久留倍遺跡周辺が「壬申の乱」以降、王権から聖地視されていた可能性はある。

《Ⅲ期　８世紀後半（ＨＰでは奈良時代末～平安時代前期）》

・「朝明郡衙」の正倉院（あるいは正倉別院）と考えられる。

《久留倍官衙遺跡と斎宮跡》

・いずれも「壬申の乱」と関連の深い遺跡である。

・持統は、持統六（692）年の伊勢行幸だけでなく、大宝二（702）年にも三河に先だち伊勢へ立ち寄っている可能性はある。（行幸出発ののち、「的形」を経て、三河から尾張に至るのに 33 日かかっている。）

→持統自らが「斎王」の役割りも担う意図がある？

・久留倍Ⅰ期が持統上皇の行宮である場合、斎宮と久留倍遺跡の関係はより深かったと言えるのではないか？**いずれも天照大神への王権の崇敬を示すものであり、斎宮を通る古代「伊勢道」は、斎宮だけでなく**

持統の行幸が整備の契機だった可能性も出てくる。

・聖武も天平十二（740）年の東国行幸に際し、伊勢神宮に幣帛（みてぐら）を奉らせている。

【参考】

持統天皇伊勢行幸　持統六（692）年

２月１１日　諸官に伊勢行幸を告げ、準備させる。
中納言三輪朝臣高市麻呂は、農事の妨げになるとして伊勢行幸に反対する。

３月　３日　広瀬王らを留守官に任じる。中納言は再度天皇を諫める。

３月　６日　行幸出発

３月１７日　通過する神郡と伊賀・伊勢・志摩の国造に冠位を賜る。

３月１９日　志摩国の百姓で男女80歳以上の者に稲を50束ずつ賜った。

３月２０日　天皇の車駕（しゃが）が浄御原宮に還った。

※『万葉集』巻七

大き海に嶋もあらなくに海原のたゆたふ浪に立てる白雲（1089番）

右の一首は、伊勢に従駕せしときの作なり

（第二回行幸の可能性はないのか？）

持統上皇三河行幸　大宝二(702)年

９月１９日　使いを伊勢・伊賀・美濃・尾張・参河の五国に遣わして、行宮を造営させた。

１０月　３日　参河行幸のため、諸々の神々を鎮め祭った。

１０月１０日　行幸出発。関係諸国の田租を免除した。

１１月１３日　尾張国に到着。（ナゾの33日間）

１１月１７日　美濃国に到着。

１１月２２日　**伊勢国に到着**。　（行宮造営を指示して６５日目）

１１月２４日　伊賀国に到着。

１１月２５日　天皇は参河から帰還。

※『万葉集』巻一

舎人娘子の、従駕して作りし歌。

ますらをのさつ矢たばさみ立ち向かひ射る的形は見るにさやけし(61番)

聖武天皇東国行幸　天平十二（740）年

９月　３日　筑紫で藤原広嗣（ひろつぐ）が反乱。

１０月１９日　伊勢国の造行宮司を任命する。

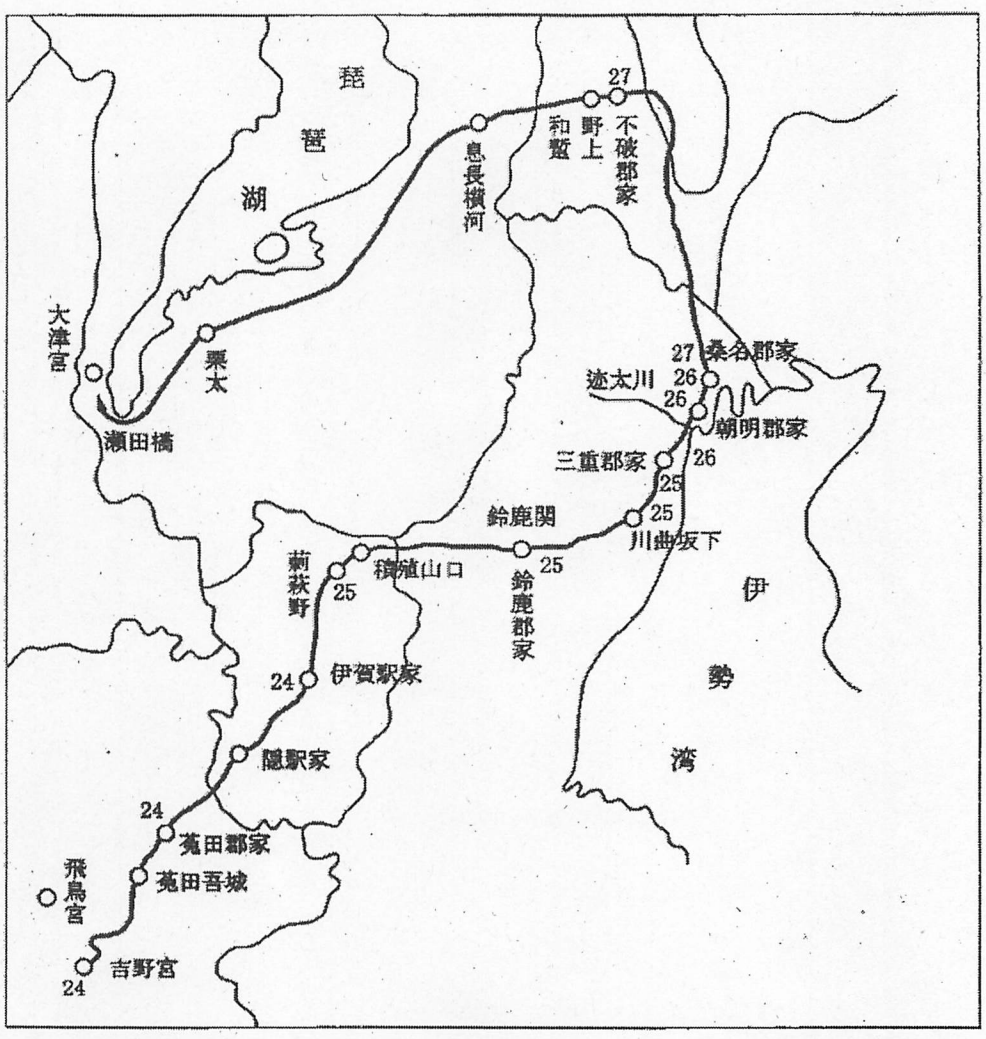
１０月２３日　行幸の次第司（行幸の列の指揮官）を任命し、約400人を徴発。

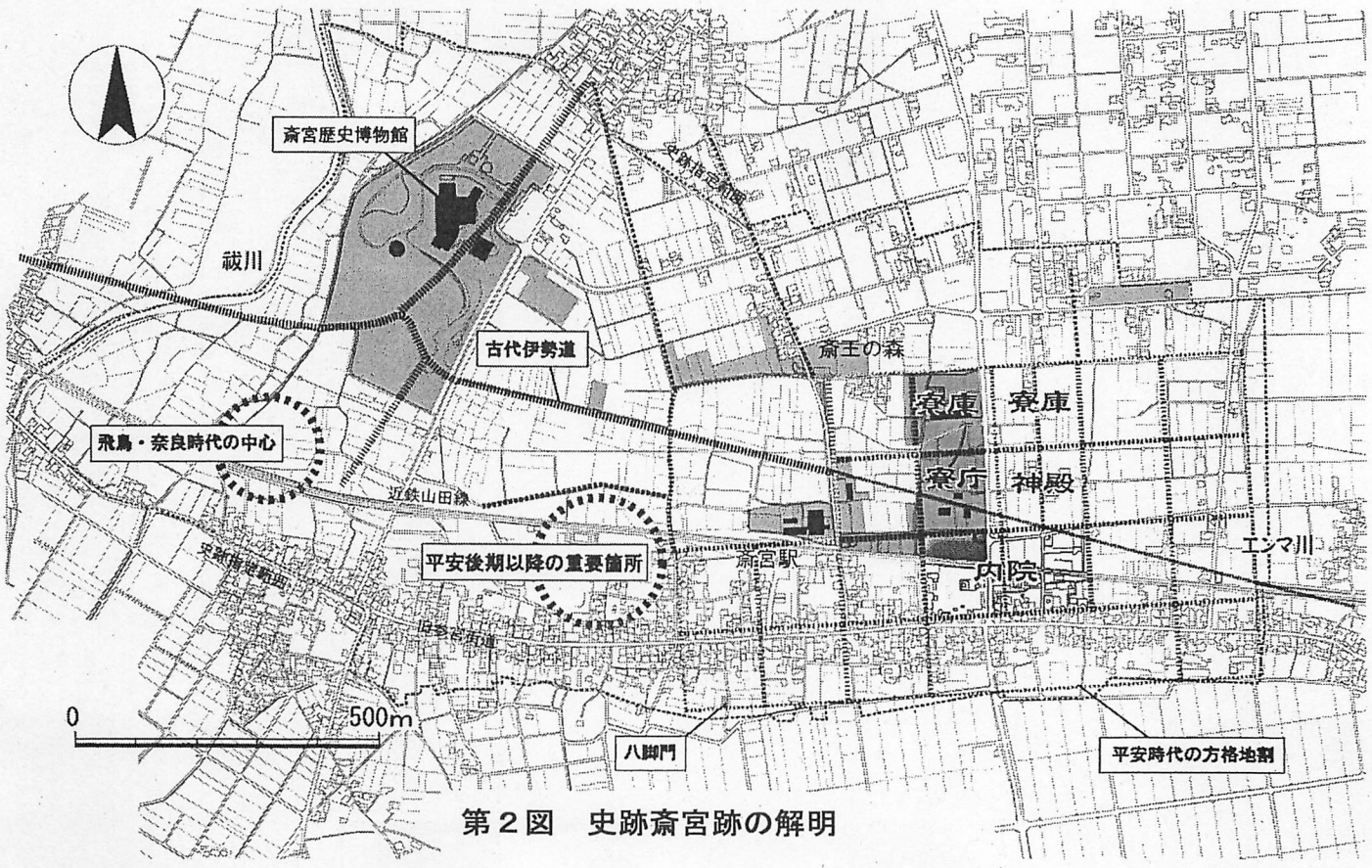
１０月２６日　大将軍大野朝臣東人（あずまひと）に、行幸に動揺しないよう勅。

１０月２９日　行幸に出発。知太政官事の鈴鹿王と兵部卿兼中衛大将の藤原豊成を留守官に任じる。
１０月３０日　車駕が伊賀国名張郡に到着。
１１月　１日　伊賀郡安保（青山町阿保）に宿泊。大雨で難渋する。
１１月　２日　伊勢国壱志郡の河口頓宮に到着。関宮と称した。
（造行宮司の任命から１５日目）
１１月　３日　少納言大井王と中臣・忌部を遣わして**伊勢大神宮に幣帛を奉らせる。**
大将軍大野東人より藤原広嗣を捕縛の言上。
１１月　４日　天皇は和遅野（わちの:白山町川口付近）で遊猟を行う。
１１月　５日　広嗣処刑の報告。
１１月１２日　車駕が河口を出発して壱志郡に至り泊まる。
１１月１４日　鈴鹿郡赤坂の頓宮に至る。（伊勢国の造行宮司の任命から２７日目）
１１月２１日　陪従の文武官・騎士らに位を賜る。
１１月２３日　**朝明郡に到着**。（造行宮司の任命から３６日目）
※『万葉集』巻六
天皇の御製の歌一首
妹に恋ひ吾（あ）の松原ゆ見渡せば潮干の潟に鶴鳴き渡る（1030番）
狭残（さざら）の行宮（かりみや）にて、大伴宿祢家持の作りし歌二首
天皇の行幸のまにま吾妹子が手枕巻かず月ぞ経にける（1032番）
御食つ国志麻の海部ならし真熊野の小船に乗りて奥へ榜ぐ見ゆ（1033番）
１１月２５日　桑名郡石占（いしうら:多度町付近）の頓宮に到着。
１１月２６日　美濃国当芸郡（養老郡付近）に到着。
１２月　１日　不破(ふわ)郡の不破頓宮（垂井町府中付近）に到着。
１２月　４日　騎兵司を解散し、京に還らせた。
天皇は国境を巡視して、夕方に新羅楽・飛騨楽を奏させた。
１２月　６日　不破を出発。坂田郡横川の頓宮（米原町醒ヶ井付近）に至った。
山城国恭仁郷を整備し、遷都の候補地とするため、右大臣の橘諸兄(たちばなのもろえ)を先発させた。（天平十三年～十七年）
１２月　７日　犬上の頓宮（彦根市高宮町付近）に到着。
１２月　９日　蒲生郡に到着し宿泊した。
１２月１０日　野洲の頓宮（守山市付近）に到着した。
１２月１１日　禾津(あわづ)の頓宮（膳所城下町遺跡）に到着した。
（造行宮司の任命から５３日目）
１２月１３日　天皇が志賀の山寺（崇福寺）に行幸し仏を拝む。
１２月１４日　禾津を出発し、山背国相楽郡の玉井頓宮に到着。
１２月１５日　天皇は先に恭仁宮に行幸し、ここを都と定める。太上天皇（元正）と皇后（藤原光明子）は遅れて到着した。

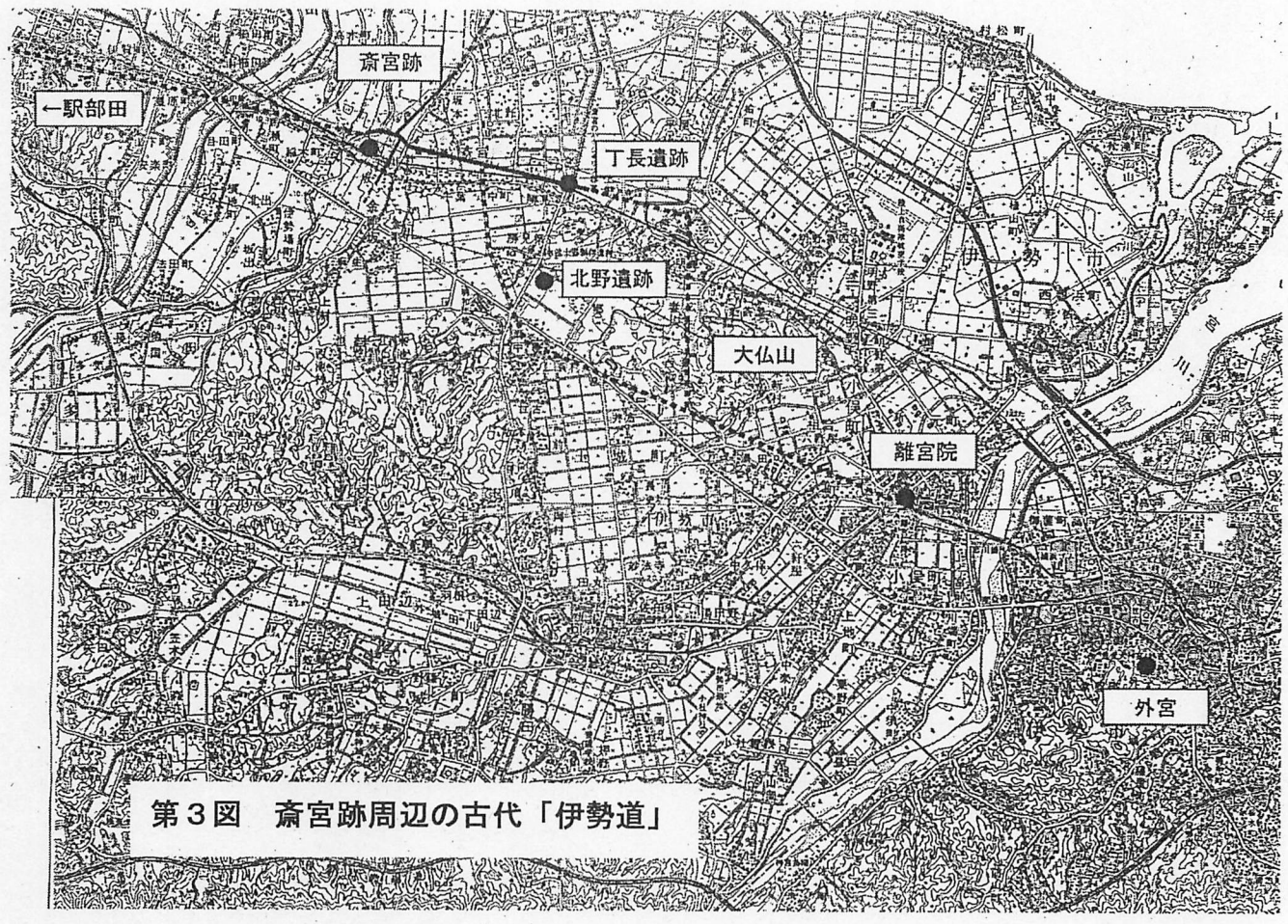
第１図
「壬申の乱」行程図

三重県「三重県史」通史編
原始・古代　2016 より



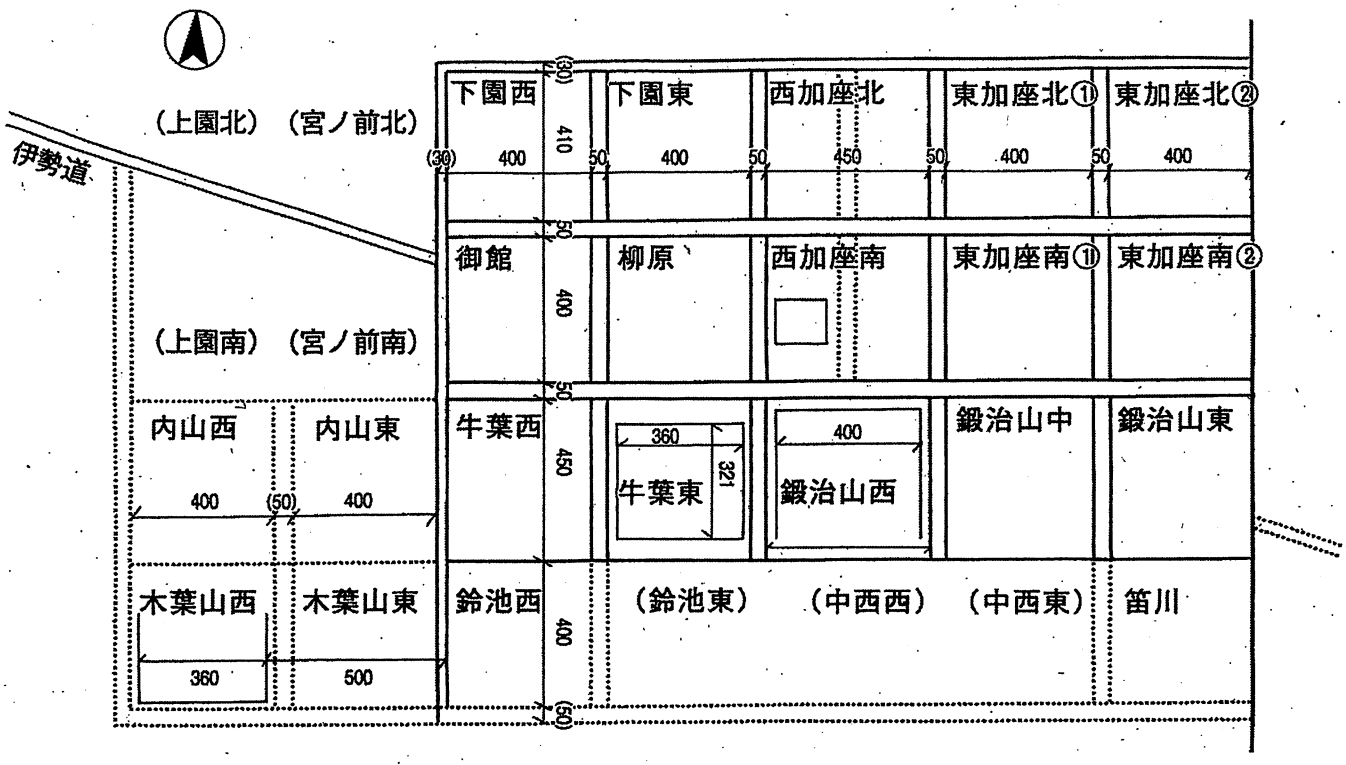


第２図　史跡斎宮跡の解明



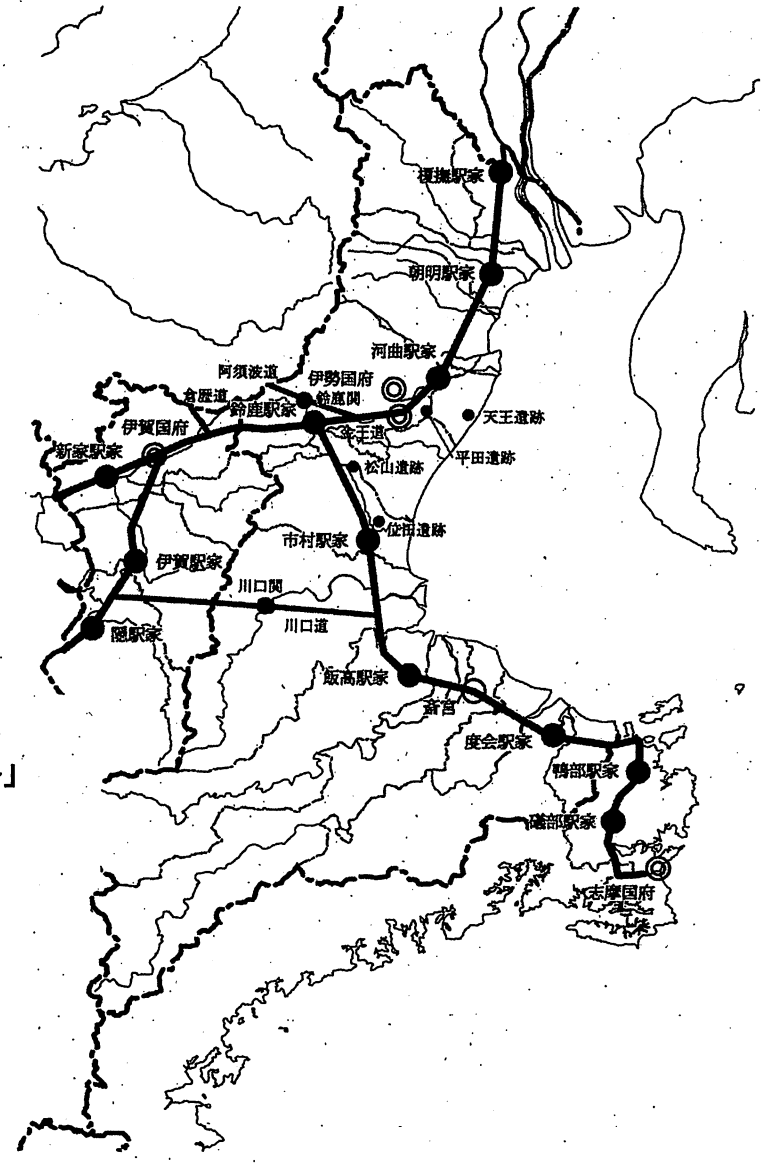
第３図　斎宮跡周辺の古代「伊勢道」

第４図　史跡西部の「初期斎宮」



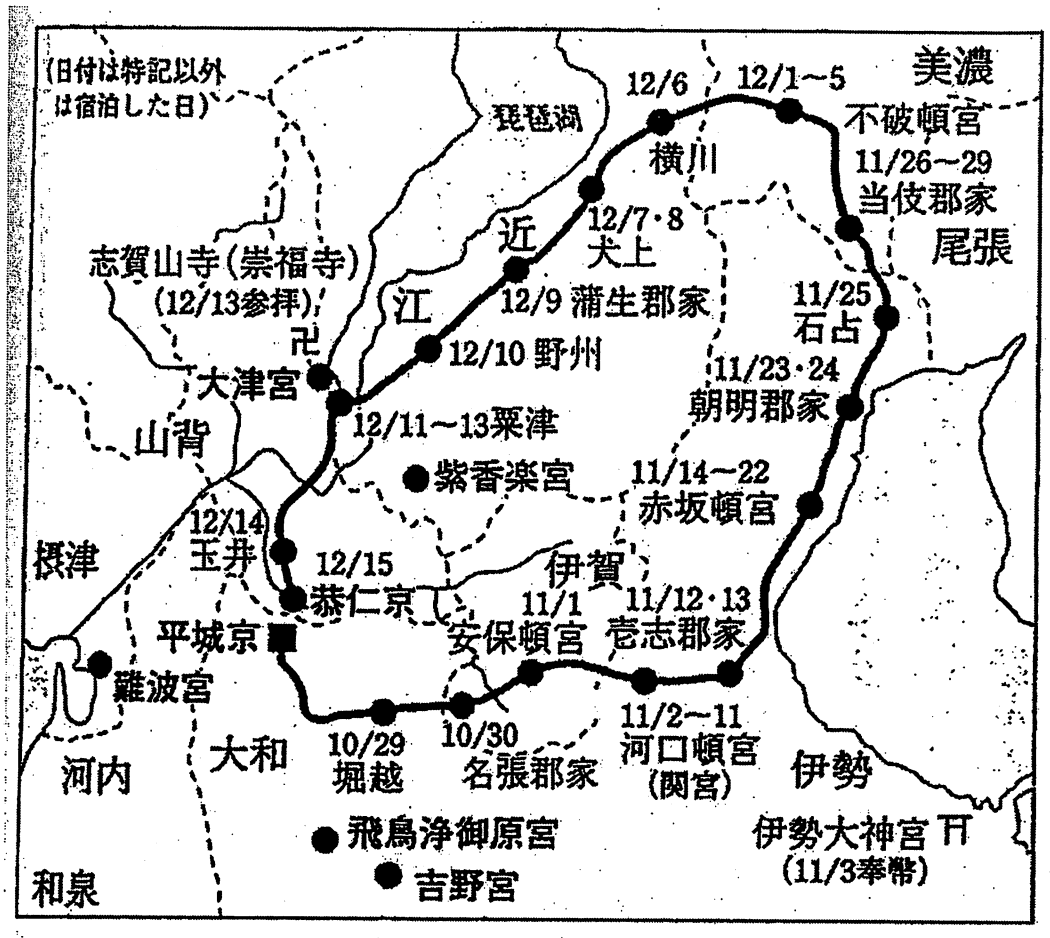
第５図　斎宮跡の「方格地割」

0　250m

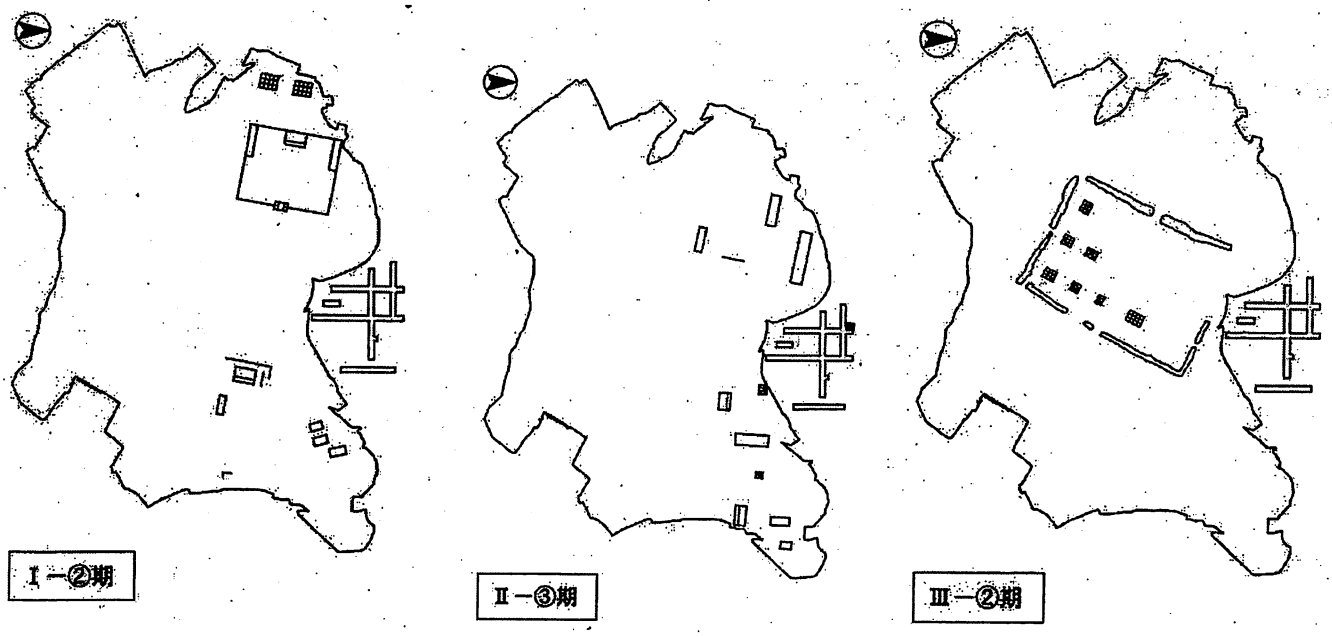


第６図　三重県内の
「駅路」・「伝路」

三重県「三重県史」通史編
原始・古代　2016 より



第７図　聖武天皇の東国行幸路　　三重県「三重県史」通史編 原始・古代　2016 より



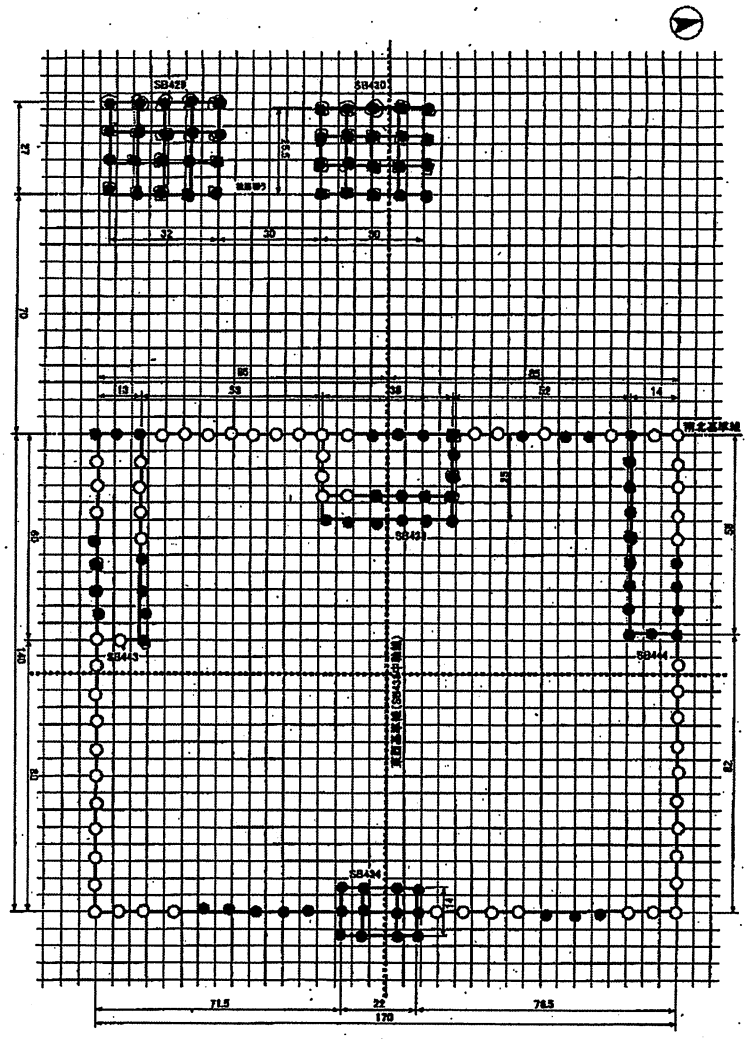
７世紀末～８世紀前半　　８世紀中ごろ　　８世紀後半以降

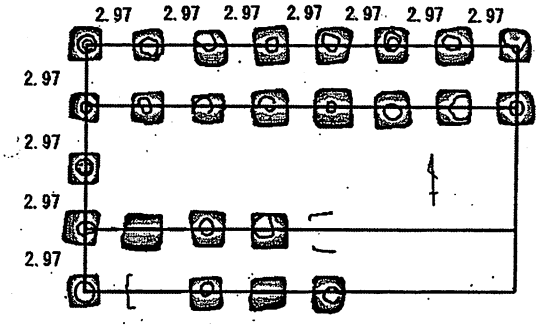
第８図　久留倍官衙遺跡の主要遺構の変遷

四日市市教育委員会「久留倍遺跡５」2013 より

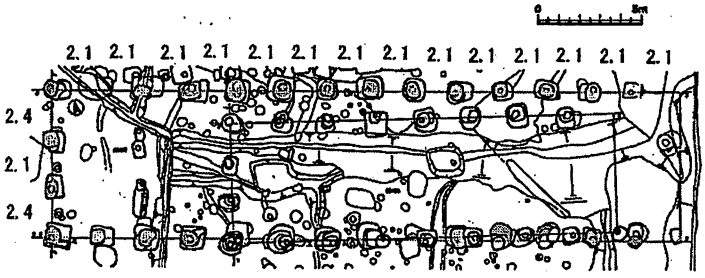
第９図　久留倍官衙遺跡
Ｉ期「政庁」の
遺構配置図

四日市市教育委員会「久留倍遺跡５」2013 より

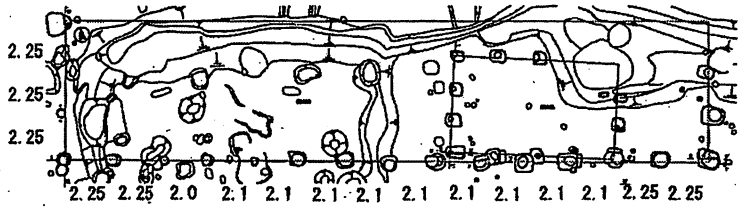




膳所城下町遺跡
ＳＢ１
（7間×4間・二面庇）



久留倍遺跡
ＳＢ４３７
（14間×3間）



久留倍遺跡
ＳＢ４３９
（14間×3間）

第１０図　久留倍官衙遺跡のⅡ期の大型建物と聖武天皇「禾津頓宮」

四日市市教育委員会「久留倍遺跡５」2013・滋賀県教育委員会ほか「膳所城下町遺跡」2005 より